

開催地名：福岡県芦屋町	
開催日時	令和元年 10 月 11 日（金） 19：00 ～ 20：30
開催場所	芦屋町町民会館
語り部	岩橋 光善 （福島県南相馬市）
参加者	芦屋町消防団、自主防災組織（自治区）、女性防火クラブ、町民 約 80 名
開催経緯	芦屋町では公助に対する住民の期待が高く、自助・共助の意識向上まで至っていないこと、これまで大きな災害被害なく、行政・住民ともに防災意識の向上を図ることが必要なことから、東日本大震災をご経験された語り部をお招きし、災害時の体験や教訓などをお話いただきたい。
内容	<p>（1）南相馬の状況</p> <p>政府は、東京電力第一原子力発電所から半径 20 キロ圏内の住民に対し、3 月 12 日の 18 時 25 分に避難を指示した。これに伴い、南相馬でもバスを使って集団避難を開始した。新潟県の上越市、糸魚川市、群馬県の吾妻町、片品村という所に、バスで集団避難を行った。バスでの避難なので、大きな荷物を持っていく事は出来ない。20 キロ圏内の方々は、避難所に集合し、本当に身の回りの物だけを持って、そのままバスに乗せられて避難した。父親、祖父母、息子、娘、孫がばらばらに避難したケースも見られた。地震と津波の被害だけなら、仮設住宅に家族ごとに避難できるので、地域のコミュニティも壊れない。しかし、原発事故は別である。コミュニティごとに避難できなかったため、避難先では見ず知らずの方々がほとんどというケースも多く、コミュニティを形成するのに時間がかかった。孤独にさいなまれ、相談できない、話し相手もない、そういう環境があちこちで見られた。</p> <p>南相馬は、1 市 2 町が合併して 12 年になる。現在の人口は 45,000～46,000 名で、20,000 名程度がまだ戻っていない状況である。中でも小高区については、震災前に 12,000 名ほどの人口だったが、ようやく 3,610 名が戻ってきたに過ぎない。これが原子力災害の状況だ。津波被害だけであれば、一時的に避難してもすぐに戻ることができ、仮設住宅に家族が避難できるわけだが、原子力災害は、放射能汚染の圏外に避難する必要があり、家族が分散して避難しているのだ。南相馬は、現在の世帯数は震災前とほとんど変わらないが、帰還した方々が、現在は分散して住んでいる。3 世代 1 家族だった家庭が、2～3 家族に分散しているため、世帯数がそれほど大きくは減ってないという状況である。</p> <p>（2）災害に負けないために</p> <p>地域住民が生き残らなければ地域の復興はできない。住民がいての復興である。無人になった所に復興はない。まずは生き残ることが重要だ。また、避難と</p>

ということは、全て他の人に頼るということである。これは今回、我々みんなが自覚できたことである。自分たちは、何も持たずに避難してきたわけで、ご飯を作ってくれるのも他人だし、移動するにも車は津波に流されてしまっている。全て他人の援助や協力で成り立っており、他人の世話にならないと暮らしていけず、計り知れないほど精神的な苦痛を受ける。これが避難である。本当に「惨めなこと」とみんなが感じた。従って、避難者にならないよう、自分でできることは予め実行することが大切である。最低限必要なものを備蓄すること、近所の方々とコミュニティを作って、日頃からつながっていること、こららはとても大切なことであると思う。

南相馬市は旧中村藩である。国の重要無形文化財に指定されて、1,000年の歴史があると伝えられる神事、「相馬野馬追」が有名だ。震災で大きな被害を受けても、これはこの地区の一つの心として、何があっても守っていく、一つの大きな力になっている。高齢化も進み、伝統行事がだんだん継承できなくなっているなかで、何とか伝統行事を守っていくことが復興につながると信じ、その活動を今行っている。皆さんも伝統行事を大切にしてもらいたいと思う。



開催地より

地震、津波の被害だけでなく、原子力発電所の怖さにもおびえながら避難せざるを得なかった方々の苦しみがよくわかった。今後の防災活動に非常に役立つ内容だった。